

恋結び

Asuka & Ryuji

明里もみじ

Momiji Akeoato

termity



エタニティ文庫

目次

恋結び

5

書き下ろし番外編
おねだり

325

恋結び

第一章

急いで行動すると、ろくなことにならない。だから時間に余裕を持って行動しなさい。

——それは古籍こせきあすかが、昔から母親に言い聞かせられてきた言葉だ。

だが、マイペースでうっかり者なあすかにとって、母の言葉を実行することはなかなか難しい。女子大への進学を機に地元を離れて二年が経ち、ひとり暮らしに慣れてきたと同時に、気の緩みも出てきたのかもしれない。

時間に余裕を持って行動できなかった結果、あすかは今まさに窮地きゆうちに陥おちっている。

今日は大学の定期試験の初日だった。寝坊してしまい、アパートを飛び出したのは数分前。大学までは自転車でも十分もかからない距離で、今ならなんとか間に合う。そう思いながら全速力でペダルをこぎ、脇道から大通りに出ようとした際、突然ブレーキがきかなくなってしまった。

そして「あれ？ あれ!？」と焦っているうちに、停車していた黒塗りの高級外車にぶつかったのだ。

目の前に停まっている高級外車のバンパーには、くつきりと傷跡がついていた。

「うわ……やばい。……どうしよう」

幸いなことにあすか自身は無傷で済んだが、車のバンパーの傷はひどい。また、自転車はぶつかった衝撃で前輪がぐにやりと曲がり、もう動かせないほどの有様ありさまだ。

(と、とりあえず警察に電話っ！ いや、保険会社に連絡するほうが先……？ つああ違う、まずはぶつかった相手に謝らないと！ それから怪我がないか確認して……あとはお母さんたちに知らせなきゃ。……うう、絶対に叱られる。しかもこんな高級な黒塗りの外車に乗ってるなんて、ヤのつく人のイメージしかないんだけど……)

動揺したあすかの思考はまとまらず、傷ついたバンパーに視線が釘くぎづけになってしまっ。

「おい、このくそガキ、聞いてんのか!」

突然怒鳴り声が聞こえて、あすかはやっと顔を上げた。すると屈強な男が怒り心頭という様子で迫ってきて、こちらに手を振り下ろそうとしている。

「わあ!？」

「何度声かけても無視しやがって……! まさかこの車にどなたが乗ってるのかわかっていて、ぶつかったんじゃねえだろうな!」

その言葉で、あすかは状況を理解した。故意ではないものの、自分は謝罪もせず男を

無視したかたちになったのだと。車の運転席のドアが開けっ放しだから、この男はきっと運転手なのだろう。

殴られる——あすかはとっさに首をすくめ、目をつぶった。

「やめなさい」

その声で、男は動きを止める。声を発したのは助手席から降りてきた新たな人物だ。びしっとしたスーツに身を包んだその人は、女性と見まがうほどの美貌の男性だった。

「……っ、佐賀里幹部」

「女性を脅してどうするのです」

「も、申し訳ありませんっ」

佐賀里という人物に注意されただけで、威勢のよかった男の態度が豹変する。

あすかは、佐賀里の顔をまじまじと見つめてしまった。こんなに美しい男を、彼女は今まで見たことがない。まさに花顔玉容だ。いつまでも眺めていたくなるほど美しい。けれど瞳は鋭くどこか冷たい印象で、近寄りがたい雰囲気醸し出している。

「お怪我はありませんか」

佐賀里はあすかのほうを向くと、声をかけてきた。

彼に見とれていたせいで、あすかは反応が遅れてしまう。

「へ……？ あ、な、ないです！ あのっ、そちらのほうは、お怪我は？」

「それはよかった。こちらもお怪我はありません。……あなた、学生の方ですか」

「そうです。……って、あっ、あの、急に飛び出してすみませんでした！」

自分の失態に気づき、あすかは勢いよく頭を下げた。やっと謝罪を口にできて、ほとと吐息をもらす。

「おや」

佐賀里はわずかに目を見開き、そうつぶやく。あすかは続いて運転手に向き直り、頭を下げた。

「あの、先ほどはすみませんでした。事故に驚くあまり、無視するみたいになってしまったて……。本当にすみませんでした」

いくら茫然自失していても、謝罪もせずに相手を無視するなんて、どれほど礼儀に欠けていたか。冷静さを取り戻した今なら理解できる。

あすかの謝罪を受け、運転手の男は怒りをおさめた。

「お、おう。ま、まあ、わかればいいんだよ」

「はい。すみませんでした」

「……話を続けても？ 状況を整理しましょう」

再び佐賀里に声をかけられ、あすかは「あ、はい。お願いします」とうなづく。

まずは互いに身分を証明できるものを示すということで、相手は名刺を差し出し、こ

ちらは学生証を提示した。すると佐賀里はスマホで学生証の写真を撮る。

「自転車はずいぶんひどいことになっていますが、本当にお怪我はありませんか？」

「はい、なんともないです。あの、そちらも本当に大丈夫ですか」

「私と運転手、それにもうひとり同乗者がいますが、怪我をした者はおりません。ちょうど車に乗り込んだところで、発進していなかったのが救いでした」

「も、もうひとり乗ってらっしゃるんですか」

思わず車の後部座席へ視線を向ける。しかし窓はスモークガラスで人の姿を確認できない。

「はい。上司——うちの社長が」

「社長……って、社長さん、ですかっ？」

「ええ」

あすかの顔から血の気が引いた。社長ということはヤのつく職業の人ではなさそうだが、きつと多忙だろう。対応を急がねばならない。

「……警察、呼びます」

あすかがスマホを取り出そうとしたら、佐賀里に制止された。

「いいえ。その必要はありません」

「え、でも……」

事故が起きたとき、怪我がなくとも警察へ連絡する義務がある。損害賠償額ばいしょうが関係する過失割合を決めるためにも、警察が作成する実況見分調書じつげんぶんていしょが必要だからだ。

しかし佐賀里は淡々と述べた。

「先ほどご自分でもおっしゃったでしょう？ 飛び出してきたのはあなたですよ。ほら、車に傷がついています。弁償していただくかなくはいけませんね」

「だから、あの、警察を呼ばないと……」

「ええ、その必要はありませんね」

「へ？ いや、け、警察……」

なぜか話が噛み合わない。あすかは不安に襲われた。

警察を呼ぶべき状況なのに、佐賀里はそれに応じようとしない。そんなやり取りが続いたのだから、マイペースで鈍いにぶと言われることのあるあすかでも不審に思った。

警察を呼ばれるとにかまはずい事情でもあるのか、と。

「……どうしよう……」

内心で頭を抱えながら思案する。

（どうすれば——っ！）

そのとき、ふと自分の手首に巻かれた腕時計が目に入り、あすかははっとした。

「——ああっ！ 時間が……っ」

「時間？」

「きよ、今日、大学の試験なんです！ それで急いでいたら、突然自転車のブレーキがきかなくなつて、飛び出しちゃつて……。ああ！ やばい、遅れる！」

（このままじゃ試験に間に合わない……！ でも、事故現場から離れちゃまずいよね！ 本当にどうしよう……つ）

こうやって考えているあいだも時間が過ぎていくばかりだ。

おたおたと慌て出したあすかをよそに、佐賀里はおもむろに車の後部座席へ近づくと、スマートフォンがガラスがわずかに下がり、車中の人物と佐賀里が短くやり取りをした。そして彼はあすかに向き直る。

「失礼」

「……っ。あの、すみませー」

「先ほど渡した名刺、出していただけますか」

いきなりの話題転換にあすかはしばし目を瞠みはつたが、言われたとおり名刺を取り出す。

「……これ、ですよね」

「ええ、それです。このあと試験なのですよね？ では試験が終わりましたら、そこに書いてある住所のビルにいらしてください。受付で私の名刺を出せば済むよう、話を通しておきます」

「え……それはどういう……」

あすかは理解が追いつかず、まごつく。

「ところで時間は平気ですか」

「あっ！」

佐賀里の一言ではっと我に返り、あすかは手渡された名刺と佐賀里の顔を何度も見比べる。彼はすでに話を終えたつもりらしく、それ以上はなにも言わなかった。

このままでは本当に試験に遅れてしまう。しかし接触事故の相手との話し合いが終わっていないのに、この場を離れても平気なものなのか。

あすかはしばらく逡巡しゆんじゆんしたが、天秤てんびんは目先のことに傾いた。

「……っ、すみません。絶対に、試験が終わったらそちらへうかがいます！」

勢いよく頭を下げ、急いで壊れた自転車を押し始める。

あすかは去り際に振り返って、もう一度叫んだ。

「絶対に！ 試験が終わったら、謝罪と話し合いに行きますからー！」

それだけ言うと全速力で大学への道筋を辿った。

そして、定刻のぎりぎりまで試験会場に滑り込み、あすかは試験を受けることができた。しかし事故後で平静ではなかったからか、出来は散々だった。単位取得に必要な点数を

取れたかどうか、微妙なくらいだ。

試験が終わり事故後の対応を思い返すと、血の気が引いた。その場で警察に連絡しなかったばかりか、証拠として接触箇所を写真に残すことを忘れていたのだ。これでは今朝の事故でついた傷がどれなのか明確にできない。なんと問拔けなのだろう。

(もしも朝まで時間を戻せたら、絶対に警察を呼んだのに……)

考えてみれば、病欠で試験を受けられない学生のための再試験が、来週行われるはずだ。事故があったことを証明できれば、今日の試験に間に合わなかったとしても再試験を受けられたかもしれないかった。

けれど後悔しても後の祭り。あすかは渡された名刺に記載された住所へバスで赴いた。「ここ……だよねえ」

七月の太陽に照らされながら、悠然とそびえ立つビルを見上げる。周りはオフィス街で、自分のような学生はほとんど見かけない。スーツに身を包んだ大人ばかりで場違いな気がする。

しかしこのまま逃げるなんてできない。事故を起こして責任も取らずに逃げるなど、許されぬ行為だ。

「女は度胸、女は度胸だ……!」
妙に男らしい台詞を唱え、額に滲む汗を拭ってから、あすかは近代的なビルに足を踏

み入れる。清潔感のあるエントランスに圧倒されつつ、とりあえず受付へと向かった。

受付嬢に今朝もらった名刺を見せると、彼女は「少々お待ちください」と電話で連絡を入れる。そして一言二言話をする、受話器を置いてあすかに笑みを向けた。

「そちらのエレベーターで最上階まで行ってください」

「あ、はい。わかりました」

(最上階……)

緊張を隠せないまま、言われたとおりエレベーターで最上階に向かう。その最中、もらった名刺を何度も見直した。そこには『社長秘書』と印刷されている。

(このビル全部、この会社のものってことはないよね。そんな大物の車を傷つけちゃったとしたら、とんでもない弁償額を提示されるかも……。うう、だめだ、怖くなってきた) いやな想像を膨らませているうちに、エレベーターは最上階に到着して、扉が開く。おそるおそる降りると、今朝会った美貌の男——佐賀里がいた。

「お待ちしておりました」

「あ、の……こんにちは」

あすかはぺこりと頭を下げる。そのとき、「まさか本当に来るとは」という小さな声
が聞こえた。

(……あたし、信用されてなかったんだなあ)

あすかの顔に自嘲気味な苦笑が滲んだがなんとか顔を上げると、佐賀里は廊下の奥にある扉を示した。

「どうぞこちらへ、古籍あすかさん」

「あ。はい」

しかもぼつちり名前まで覚えられていた。学生証を見せたので当然といえば当然なのだ、名乗る前に呼ばれると背中がひやりとする。

「あ、改めまして、古籍あすかといいます。今朝は本当にすみませんでした」

「いいえ。謝罪は中でお待ちの社長にお願いします」

「あ、社長さんに……」

重い扉を開けて、さらに奥にある部屋へ促された。

ぶつかった車に乗っていた最高責任者が社長なのだから、その人物と話をしなくてはならない。わかっていたのにいざ対面するとなると、とてつもなく緊張する。なにせ今まで、社長なんて立場の人に会ったことすらないのだ。

粗相をしないか心配でたまらない。どくどくと鼓動が大きく響き、まるで耳元で心臓が鳴っているみたいだ。

そんなあすかをよそに、佐賀里は二枚目の扉をノックして声をかける。

「社長、いらつしやいました」

彼は返事を待たずに扉を開けた。その部屋の中央には重厚なテーブルと革張りのソファークラッシュが置かれている。さらに奥にある格式高い執務机に男が座り、電話をしていた。

しかしこちらに気づくと、躊躇なく受話器を置く。相手の都合などお構いなしの行動に目が点になる。

(……すご。いいのかな)

執務机に座る社長と思しき人物は、顔を上げてこちらを見た。

「よう。来たな」

「あ、あの、今朝は本当にすみませんでした」

あすかは気づけば、男の視線を避けるように頭を下げていた。

(……やっちゃったー……！)

正直に言えば怖気づいたのだ。事故を起こしてしまった非があるあすかは、相手の視線に耐えられる自信がなくて、怯えてしまった。車を傷つけた上に相手の視線を避けるなんて失礼な態度をとっては、きつと男は怒るだろう。

怒鳴られるかもしれない。ぎゅつと唇を噛んだ。

「ああ、いい。顔を上げろ」

——しかし予想と反してどうしたことが。相手の声に怒りは含まれておらず、むしろ

機嫌がよさそうに聞こえた。

(……あ、あれ。怒って、ない、……? もしかして聞き間違い、とか)

いや、そんな都合のよい間違いがあるはずもない。あすかは不安を覚えながらも、そろそろと顔を上げる。

そして、社長らしき人物の顔を目にした瞬間――

(……は?)

それまで胸中で渦巻いていた不安や迷いなど、完全に消え去った。思わず、ぼかんと口を開けてしまう。

三十歳そこそこの社長と思しき男は、色味の濃いスーツを身にまとっていた。座っていてもわかるほど長身だ。一見軽そうに見えるものの、自信に満ち満ちた精悍な顔つきと少し垂れた目尻が印象的な美丈夫である。あまり異性に興味を持たないあすかですえ、惚れ惚れするほどの容貌だ。

「どうした」

男は怪訝そうに問いかけてくる。しかしそれに答えず、あすかは叫んだ。

「……若っ!」

端正な男が眉間にしわを寄せた。

「……なに?」

「社長さん、若い! え、本当に社長さん!? うわあ、しかもめちゃくちゃ格好いい! 全然想像してたのと違っただし! 社長さんっていうから、てっきりもつとおじさんなのかと……っ」

そこまで言ったところで、はっと自分の失言に気づくあすか。慌てて口を押さえたがもう遅い。ちらりと視線を向けると、社長と佐賀里は予想外のことを言われた、という顔をしている。

やってしまった。ありえない大失態を犯してしまった。

(ひいっ、しまったああああ!)

あすかはうな垂れ、目を閉じた。うっかりにもほどがある。

(なんてことを……っ。やばいやばいやっちゃった、やってしまったよ! あたしのあほーっ!)

「……すすす、すみませんごめんなさいっ」

まるで子どものように身体を小さくして謝った。謝罪して許される失言じゃないことはわかっているけれど、謝ることしかできない。じわりと涙が浮かんでくる。

(絶対怒られる……!)

ところが、社長の反応はまたも予想外のものだった。

「俺は想像していたよりも若いか」

「……へ？」

顔を上げると、彼は楽しそうに口元に笑みを浮かべていた。

あすかは呆気にとられ、内心で首をひねる。こういう場合は怒鳴り散らされるものではないのか。そのために呼び出されたのではないのか。

理解の追いつかないあすかに、社長が唐突に言う。

「それより腹が減ったな」

「……っ、はい？」

「昼はまだだろ？ 付き合え」

（は、え、い、いきなりっ？ 昼って、お昼ご飯？ 今？ 今から？ え、ええっ？）

男は椅子から立ち上がり、まだ頭が混乱しているあすかに近づいた。

「名前は」

「古籍あすかさんです」

そばに控えていた佐賀里がすかさず答える。

「あすかか。よし、あすか。おまえはなにが食いたい？」

「え、あ、う、っと、お、お寿司っ」

思わず素直に好きなものを答えてしまったあすか。しかし答えた直後、こんな状況で馬鹿正直に返事をする者などいないと気づく。社長もそう思ったのか、くっとう喉を鳴ら

して笑っている。そしてあすかの肩に腕を回した。

「行きつけの店に連れて行ってやる」

「……っ」

（肩！ ぎゃあっ）

突然触れられたため心の中でかわいくない悲鳴をあげたが、幸いにも唇からもれ出ることはなかった。

（え、ほ、本気？ 本気で言ってるの？ これ）

社長は決定事項だとはかりに歩き出す。それを、秘書の立場にある佐賀里が引き留めた。

「社長。このあと会食の予定が入っていることをお忘れですか」

「断つとけ。俺はあすかと飯を食う」

「……っ」

（なんでもいいから、肩を抱く手を外してーっ）

反論をしようにも声が出てこない。あすかは事態についていけず固まるのみだ。

そんな彼女をよそに、佐賀里は上司に向かったため息をついた。

「まったく……勝手な都合で予定をキャンセルなさるのは、社長としていかがなものか
と思えます」

「おまえこそ俺の目を盗んでは楽しんでるだろうが」

「人聞きの悪い。私は自分の仕事に責任を持っていますよ。仕事を放って会ったばかりの女性を強引に食事に連れ出したりはしません」

「思っていた以上に面白いからな。もっと知りたくなった」

(……?) なんの話をしてるんだろ?)

すぐそばで会話が飛び交っているのに、さっぱりついていけない。

「どうせ、役に立たないくだらねえ話を延々とするような相手だ。俺じゃなくてもいいだろ。佐賀里、代わりにおまえが会食に行けよ」

「お断りします。そうですね、私も先方の無駄話にはほどほど呆れていましたから」

綺麗な顔をして辛辣な言葉を吐く佐賀里に、あすかはびっくりした。しかしこれが彼の本来の姿なのだろう。その証拠に社長はまったく驚いていない。

「キャンセルします」

「ああ、任せた」

そして結局、会食はキャンセルされる運びとなった。

呆然としていたあすかは、再び歩き出した社長に肩を抱かれたまま、部屋から連れ出される。それから彼は、会社の裏に停まっていた車に乗り込むまで一言も発しなかった。そんな彼に気圧されつつ、あすかは車に押し込まれたのだった。

人間とは実にゲンキンな生き物だと思う。

車が向かった先は、社長がひいきにしているという寿司屋だった。カウンターに座って、頼んだ寿司を職人が目の前で握ってくれる店だ。回転寿司屋でしか寿司を食べたことがない庶民のあすかは恐縮しきりで、借りてきた猫のように寿司が握られる様子をただ眺めていた。

ところがトロの炙りを目にした途端、テンションが上がってしまった。今朝は寝坊して朝食を食べられなかったので、実はかなり空腹だったのだ。

「すごい！ すごく美味しそう！」

自分がなぜ社長に会いに来たのか、あすかの頭からは抜け落ちていた。隣に座る社長に対して当初抱いた緊張など、今はすっかり忘れている。

気づけばひとつずつ握ってもらおう寿司を、次から次へと頬張っていた。

「……美味いっ！ こんなに美味しいウニを食べたの、初めてです！」

「ありがとうございます」

思わず素直に職人に感想を伝えると、相手の表情はやわらかくほころんだ。隣で寿司を食べている社長もどことなく機嫌がよさそうである。

「美味いか」

「んっ、すごく美味しいです。社長さんっていつもこんなに美味しいお寿司食べてるん

ですか?」

「社長はやめろ。長門ながとだ。長門隆二」

なにを言われているのかわからず、あすかは小首を傾ける。彼は社長なのだから、呼び方として間違っていないはずだ。

すると社長——長門は、言い聞かせるように言葉を続けた。

「あすかは俺の部下じゃないだろ? 俺もおまえのことは名前で呼んでる。それなら、おまえも同じように名前で呼ぶのが妥当だろ」

長門としては筋すじの通った話らしいが、どう見ても自分より十歳ほど年上の相手を名前で呼ぶなど無茶な要求だ。ついでに、初対面である自分に対して『あすか』と抵抗なく下の名を呼ぶのもおかしい。

「えっと……」

無理だ。さすがに呼べない。

「ほら、呼んでみる」

「……あの」

「ほら。どうした」

何度も催促される。当然躊躇ちゅうちよしたが、どうやら呼ばないという選択肢は与えてくれな
いようだ。

だからあすかは仕方なく言ってみた。

「長門さん……で、いい、ですか?」

「な、ま、え、だ」

「う……」

どうしても曲げそうもない意思を感じ、彼女は困り果て両眉を下げる。

すると、あすかの目の前に出された甘エビが一貫、長門の指に攫さらわれていく。

「ああーっ!」

「ちゃんと呼べたら食わせてやる」

「ずるい! 横暴!」

相手が年上であることも社長だということもすっかり忘れ、感情のまま叫んでいた。

「言ってみろ。早く言わなきゃ俺がもうぞ」

「だ、だめ! ……です!」

ふふん、と意地悪く笑われる。どうやらこれは従うほかないらしい。

あすかは渋々、長門の望みどおりにした。

「リユー……ジさん、でいいんですよねっ」

「よくできたな。ご褒美だ」

長門はにやりと口元に笑みを浮かべ、あすかの前に甘エビを戻す。戻ってきた甘エビ

を見て、もやもやした気持ちなど吹き飛んだ。

「いただきます！ うーん、ぷりぷり〜」

やっと味わうことのできた甘エビに、にっこり頬が緩む。美味しい。これは待たされたかいたったものだ。

「ついでに敬語もなしだ。……といっても、すでに俺にため口を利いてるから、関係ねえか」

そこでふと気づく。言われてみれば、甘エビほしきについてうっかり『ずるい』だの『横暴』だのと言ってしまっていた。

「んぐ。あう、すみませ……」

「敬語なし、な」

「う……」

「なし、だ」

「……はい。じゃなくて、わかった」

「おう」

（ほ、本当にいいのかな）

けれど本人がそうと望むなら、気にするだけ無駄かもしれない。

少々納得いかない気持ちを切り替えるために、熱いお茶を一口飲む。

（……まあ、本人がいいって言うてるならいいよね、うん）

そう自分に言い聞かせ、あすかは長門に顔を向けた。

「ところで社長さ……じゃなかった、リユージさん」

早速言い間違えるとじろりと睨まれて、すぐに言い直す。

「遅くなったけど、事故のこと、保険会社と警察に連絡しようと思ってる」

そもそもこの話をするためにあすかは彼に会いに来たのだ。

「高校のときに自転車事故の保険に入ったんだよ、たしか。大学入ってからその保険を続けているはず」

両親に手続きをしてもらったから記憶は曖昧だが、問い合わせればわかるだろう。

「警察には連絡し損ねちゃったけど、あたしが飛び出したのも、そっちの車に傷つけたのも事実だから、ちゃんと弁償します」

「ああ、そのことなら気にするな」

さらっと言われて、あすかは首を傾げた。

「どういうこと？」

「あすかに弁償してもらうつもりはねえってことだ」

「いやそれはさすがに……。あの佐賀里さんって人も、弁償してもらわなきゃって言うてたし」

過失があれば弁償責任は発生する。なんの責任も果たさないといいわけにはいかない。しかし長門は首を横に振る。

「あいつの言うことは真に受けるな。といっても、おまえ以外なら弁償させるがな」
 ますます意味がわからない。

「そんなわけにはいかないよ。このままじゃなにも償えない」

「謝罪したろ」

「それは当然というか、ただ謝っただけで……」

「そもそも、弁償させるつもりなら飯に誘わないだろ。さっさと金払わせるなりなんなりしてる」

「いやいやいや。リユージさんの気持ちはわかったけど、やっぱりこのままにもなしじゃだめじゃないかな。事故の過失はこっちにあるわけだし。……正直、難しいことはわからないから、保険会社に任せることになると思うけど」

なにせ事故を起こしたのは初めてなので勝手がわからない。

「変なところで頑固だな。……わかった、示談にする。じゃなきゃあすかは納得しそうもないしな。これでいいか」

「うん」

一番引つかかっていた件がとりあえずまとまった。あすかは、ほうと息を吐く。

「まあ、これでおまえの気がかりが片づくなら構わないが、これ以上あすかと金銭が絡む関係になるつーのは、避けたいところだ」

長門はがりがりと首の後ろを搔いた。

「今回俺は、おまえにせがまれて、断った弁償を受けることになった」

「そう、だね」

「あすかの要求に俺は仕方なく、不本意だが、折れたかたちだ」

「う。そうだ、ね」

「あすかの意を叶えたわけだな」

「う、うん」

「つまり俺はなにかしら、褒美をもらってもいいと思わないか」

「褒美？」

唐突すぎる話に何度もまばたきする。

「俺は主張を曲げてまで、あすかの希望を聞いたわけだしな」

「そ、そっか。あれ、そう、なのかな？ ……まあいっか」

（なんか流れが変な方向へいつてるような……）

引っかかりを覚えながらも、長門の言わんとしていることはあすかに伝わっていた。

「じゃあえっと、なにかほしいものがあるの？」

何気なく尋ねると、彼はまるで悪戯を思いついたような瞳を向けてくる。その目に射すくらめられ、あすかの脳内で警鐘が鳴った。

「いったいどんなことを要求されるのやら、と心臓がばくばくとうるさい。」

「そうだな。週に一度……いや、二度だ。俺と一緒に飯を食え」

ところが想像と大きくかけ離れたことを言われ、あすかはきよんとした。

「飯って、今みたいにな？　こうやって？」

「ああ、そのとおりだ」

「うーんと……なんで？」

その疑問は当然のものだ。提案の真意が掴めない。

あすかの問いかけに、長門はあっさり答える。

「社長なんて立場についていると、仕事絡みの相手と飯を食う機会が多い。だが、美味くなくてな。考えてみる。相手が自分の顔をうかがっているのを感じながら食う飯を、美味いと思えるか？」

言われるままあすかは想像してみた。そしてしかめ面になる。

「思えない……」

「それに比べて、おまえは本当に美味そうに飯を食う。美味そうに食うやつと食事をするれば、俺も気持ちがいい。だから、週に二度、俺の時間が空いたときに一緒に飯を食う

ぞ。もちろん俺が奢ってやるから、金のことは心配するな」

なんとも太っ腹な提案である。

あすかとしては唐突すぎる話だが、長門は冗談で言っているわけではなさそうだ。たしかに、美味しそうに寿司を食べているあすかを見て、長門も機嫌がよかった。そんな人は聞いたことがないけれど、もしかしたら人に美味しいご飯を食べさせることに楽しみを見出す男なのかもしれない。

（変わった人だなあと思うけど……。そういうことなら納得、かな）

どうしようかとあすかは考え込む。しかし結局、答えは決まっているも同然だった。

長門の要望と一緒に食事をする。あすかの望みを聞き入れてもらった代わりの提案なのだから、拒否しづらい。

それに、こちらにとつて悪い話でもなかった。実家からの仕送りとバイトでひとり暮らしをやりくりする貧乏学生としては、食事代が一食でも浮くのは助かる。

心配するとすれば、食事以外のいかがわしい意味が込められている可能性だが——それは考えなくてもよさそうだ。長門はかなりの美形で、女性に困ってはいないだろう。彼ほどの大人の男性が、あすかのような大学生を相手にするとも思えない。

つまりあすかに求められているのは、いち友人として週に二度ほど一緒に食事をする

そう捉えて、あすかは口を開いた。

「わかった。あたしたちは、リュージさんの時間が空いてるときに一緒にご飯を食べる友達ってことだよな」

大きくうなずきながら言うと、長門は軽く目を瞠みはった。そして一拍置いてにやりと笑みを浮かべる。

「……そうだとしたら、スマホの番号を教えてくださいるだろう」

「うん、いいよ」

あすかはスマホを取り出し、長門と電話番号を交換した。

登録を終えた彼は、スマホを振りながらさらに要求してくる。

「一日に一回は連絡を入れろよ」

「え、毎日ってこと？ でもリュージさんは社長さんでしょ？ 忙しいのに邪魔しちゃ

悪いよ」

「俺がいいと言ってるんだ。この約束を守らなかつたら、美味しい店に連れてってやらねえぞ。どうせ行くなら美味しいところがいいだろ」

「そりゃー……うん」

「正直なやつだな。いいか、約束だ」

長門は喉の奥で笑い、あすかに念押しした。

長門の迷惑にならないのかとか、少し強引すぎやしないかとか、あすかの心に複雑な心情が渦巻く。しかし、美味しいお店に連れてってもらいたいのも本心だ。

ゆえにここはとりあえずうなずいておくことにした。

「……うーん、わかった」

その返事に、長門は満足げに笑みを浮かべる。それを見てあすかの気が緩んだ。

「でもリュージさんみたいな人でよかったな」

「なにがだ」

「事故の相手。だって車がめちゃくちゃ高級車だし黒塗りだったから、もしかしたらヤクザの人の可能性もあるかもって思ってたんだ。勘違いして、ちょっとびくびくしてたよ。あはは」

そう笑い、あすかはアワビを口に入れる。すると、店内が少し静かになった気がした。長門が返事をしないばかりか、寿司職人が息をのんだように見えたのだ。

アワビをのみ込んだところで、あすかはばちばちとまばたきを繰り返した。そして声を潜ひそめる。

「えーと……あたし、なにか変なこと言った？」

「いや？」

「本当に……？」

「ああ、本当だとも。それよりも、俺がなにじゃなくてよかったって？」

長門はにやにやと笑みを浮かべて、なぜか楽しげに訊いてきた。なんでだろうと不思議に思いつつ、あすかは答える。

「ヤクザの人。相手がヤクザの人だったら、なんて言われるのか想像するだけでも怖いよ」「怖いか」

「そりゃ、怖いってー。まあ会ったこともないから、全部想像なんだけど。……リユージさんは怖くない？」

「――俺か」

「誰だって怖いと思うよねえ？」

同意を求めると、長門はこらえきれないといったふうにふき出した。そして「ははっ」と声をあげて笑う。

「リユージさん？」

どうして彼が笑っているかわからず、あすかは小首を傾けた。それにも構わず、長門はしばらく笑い続けている。ひとしきり笑ったあと、彼は目尻を下げて口元を笑みのかたちに刻んだ。

「想像以上だな、あすか。気に入った」

長門はあすかに手を伸ばし、指の背で頬を撫で上げる。得体の知れないぞわりとした

感覚が全身に走り、あすかはびくつと身体を揺らした。

「――っ、びっくりした。なに？」

「ん？　なんだと思う？」

「へ？」

長門の瞳の奥が鈍く光る。先ほどまでとまったく違う妖しさのようなものを感じ、あすかは少し怯んだが――

「……いや、こっちの話だ。ほら、次はなにが食いたい？　遠慮せずに言えよ」

長門はすぐに目を細め、優しい笑みを浮かべた。そして小首を傾げるあすかに、上機嫌に寿司をすすめる。

こうして、住む世界がまるで違う、長門とあすかとの奇妙な友情関係が始まったのだった。

* * *

長門隆二は三十五歳の若さながら、いくつもの会社を経営する企業人である。

だが、それはあくまで表向きの顔。本職は近衛組直系六州会会長という肩書きの、れつきとしたヤクザだ。とにかくやり手で、上部組織である近衛組三代目組長の覚えもめで

たい。

金と権力があり、見目も悪くないため、長門には多くの女性が近寄ってくる。その中で好みの相手を選び、一晩だけの関係を楽しむこともしばしば。彼が女好きであることは自他ともに認めるところだった。

そんな長門がお気に入りを見つけたのは、七月も終わりのある日。

道端に停めておいた車に乗り込んだ直後、自転車がぶつかって来たのだ。車内から見た事故の相手——あすかの容姿は平凡そのもの。これまで相手にしてきた女たちとは違うタイプだが、どうしてか興味を惹かれた。

それで長門は、あすかが会社まで来るよう部下の佐賀里に誘導させたのだ。

あすかと直接会って面白みがなければ、車の修理費として金を搾り取ればいい。そう考えていたのに、出会い頭でのあすかの発言、こちらの想像を裏切る言動に、長門は好奇心を刺激された。

いつの間にか、あすかに惹き込まれ——自分のものにしたくてたまらなくなった。

だからといって、すぐにばかりと食べてしまつてはつまらない。もっとじっくりあすかのことを知り、彼女のすべてを自分のものになりたい。幸いにして、長門がヤクザだとは思っていないようだし、時間をかけて落としていくのも一興だ。

そんな考えで、あすかが天然でやや世間知らずな大学生なのをいいことに、週に二度

食事をする約束を取りつけたのだった。すべては、彼女に会いたがために。

——一日に一回は連絡を入れろよ。

それは本気の約束だったが、あすかはそれほどの拘束力を感じていなかったらしい。事故の三日後、彼女は連絡を入れ忘れた。

そこで長門から連絡すると、当の本人はかなり驚いていた。それ以来は今のところ彼女から電話がある。

長門にとつては、楽しい時間だ。

そしてあの事故から一週間が経った昨日。事故で自転車がだめになったため、あすかは大学へ徒歩で通学していると聞いた。それならばと、長門は今日、大学まで迎えに行く約束を取りつけたのだ。

あすかから訊き出した授業終わりの時刻に、大学の正門から少し離れた場所に車を停めて待つ。しばらくして、半信半疑と顔に貼りつけたあすかが車に近づいてきた。後部座席の窓を開けて長門が顔を見せると、彼女は信じられないと目を丸くする。

「うわ、本当にリユージさんが来た……」

「なんだその顔は」

フォローが難しいほどの間抜け面だ。長門は思わず微笑をもらす。

「や……だって本当に迎えに来るとは思ってたんだよ。リユージさん、忙しそうだし……」

「昨日迎えに行くと言っただろ？ 信用してなかったのか」

「信用っていうか……」

「まあいい。早く乗れ」

言い訳も聞かず、車に乗るよう促す。少し戸惑いを見せたあすかが後部座席へ乗り込むと、運転手はすぐに車を発進させた。

「あすかに見せたいものがある」

「見せたいもの？」

「ああ。きつと気に入るぞ」

長門がにやにやしなげながら言えば、あすかはきよとんとする。何度か「見せたいものってなに？」と訊かれたが、長門は「まあ待て」とかわした。『あれ』を見て驚くあすかの顔が見たからだ。

ほどなくしてあすかの住むひとり暮らしのアパートへ到着した。車から降りると佐賀里が立っている。その姿を見て、あすかはますますわけがわからないという顔になった。

長門は片手を上げて佐賀里に声をかける。

「おう。用意できてるか」

「お疲れさまです。例のものは、こちらに」

佐賀里が身体を少しずらすと、隠れていた物体が現れる。それは真新しい自転車だった。

あすかが口を開くより早く、長門は教えてやる。

「あすかのために選んだものだ」

「え？ あたしのため？」

あすかは目玉がこぼれ落ちそうなほど大きく目を見開いた。——そう、この顔が見たかったのだ。

「もらつていいの？」

「あすかがもらつてくれなきゃ処分するだけだ」

「え、もつたないよ！」

「なら、もらつてくれるな？」

半分脅しに近い台詞を突きつける。するとあすかは「うーん」とうなって悩み始めた。しばらく考え込んでから、長門の顔を見返して再び尋ねてくる。

「……いいの？」

「遠慮するな」

「ありがとうっ」

あすかがとびきりの笑顔を向けてきた。長門はそんなあすかの頭をくしゃくしゃと撫

でてやる。撫でるのをやめると、あすかは新品の自転車へ近づいていった。

その背中を眺めつつ、長門は佐賀里に話しかける。

「自転車、どうしてここにあるんだ。先に駐輪場へ入れとけと言っただろ」

非難を含んだ低い声だったが、佐賀里は軽く肩をすくめただけで怯みもしない。

「こちらのアパートは男性立入禁止となっていて、入れなかったんですよ」

「なに?」

眉をひそめた長門の声に反応したのはあすかである。

「あ、そうだよ。ここ、女性専用アパートなんだ。家族以外の男の人は入れなくて、宅配の人でも管理人さんが対応することになってるんだよ」

家族以外の男性は立入禁止。そう聞いて、長門は不機嫌になったため、あすかは、不思議そうに小首を傾けた。

彼女は想像もしていないだろう。長門があわよくば、自転車を与えたついでにあすかの部屋へ上がり込むなどと不埒なことを考えていたなんて。

彼はしばし黙り込むと、涼しい顔をしている佐賀里を、恨みを込めて睨む。

「おまえ、知っていただろ」

「ええ。存じていました」

あすかと出会ってから、佐賀里に彼女の身辺調査をさせた。住んでいるアパートが女性専用であることは、とっくに掴んでいたはずだ。それを報告しなかったのはわざとだろう。

「おまえな……その性格、直したほうがいいぞ」

「どうせすぐわかることです。それに訊かれなかったので、わざわざお話しすることもないかと判断しました」

あすかに聞こえないように小声で咎めた長門に、佐賀里はしれっと返した。きつと、言わないほうが面白い——がっかりする長門の姿を見られる、などと思っ言わなかったのだろう。彼はそういう、性悪な一面を持つ男なのだ。

普段は従順に動く優秀な部下なのだが、人の不幸を楽しむところがある。

それはさておき、長門は楽しみがひとつ減ったと落胆した。

いやしかし、あすかの部屋に入ることにこだわる必要はない。自分の部屋に呼ばいなのだ。

そんなよからぬことを思いつき、長門はひとりほくそ笑む。佐賀里が非難めいた視線を送ってくるが、なんのそのである。

「あーすか。そろそろ飯に行くかー」

長門が声を弾ませると、あすかは振り返った。

「あ、そうだね。ってあれ、なんかリュージさん機嫌直ってる?」

「ん？ なあに言ってる、いつ機嫌が悪かったって？」
 「んん？ あれゝ気のせいかな」
 首を傾げるあすかに「そろそろ自転車を駐輪場へ置いてこい」と言うのと、彼女は気になつていたことをすっかり忘れたかのようにアパートに入つていった。

機嫌が直つた長門は、あすかを創作イタリアンの店へ連れていった。

テーブルに並べられた料理は、どれもあすかが初めて目にするものらしい。彼女は目をきらきら輝かせ、喜んで口に運んでは、「美味、おいしい！」「食べたことない味だけど、いけるね」と素直に感想を言う。その裏表のない反応は、長門を満足させた。

食事をしながら会話をしていると、長門の年齢の話が出たので素直に答えたら、あすかはたいそう驚いた。

「え、リユージさんって、三十五歳なの？ 見えない！ もっと若いと思つてたよ」

「初対面で『若い』と叫ぶくらいだからな」

「う……、あれは忘れて」

初対面での醜態を思い出したのか、あすかは恥ずかしそうに目を逸らした。その仕草に、長門は笑みを深める。

「俺にあんなふうに言つたのは、あすかが初めてだからな。なかなか忘れられないぞ」

あんなインパクトのある出来事は稀だ。あすかをからかう声音には笑いが滲んでいた。「うーん、親にもいつも言われるんだよねえ……。もうちょっと考えてから喋りなさいって。口を開くと、子どもだつてすぐにばれちゃうんだよなあ……」

子どもと言っているが、あすかはすでに二十歳。もう世間的には大人だ。それでも無理に背伸びせず、本来の性格をそのまま表に出す愚直さは、ある意味あすかの美德といえた。

「あすかはそのままでもいいだろ」

「へ？」

「素直なのが、あすかのいいところだつて言ってるんだ」

長門が正直に褒めると、あすかは数度まばたきを繰り返して、照れくさそうに笑つてうつむいた。

「そんなこと言われたの初めてだよ」

ほんのりと色づいた目元が、子どものような素顔と相反して妙に艶を帯びている。

長門は思わず、あすかに向かつて手を伸ばしたが——彼女がぱっと顔を上げたせいで、固まった。そして、行き場をなくした手を引つ込める。

(……なあにやつてんだ俺は)

自分らしくない行動に、長門は内心で苦笑をもらした。

「あ、料理冷めちゃうよね。食べよっ」

照れ隠しなのか本心なのか、あすかはまた目の前の料理に意識を移す。長門は今度こそ口元に苦笑を浮かべたのだった。

長門は、十五歳も下の大学生——それも平凡で大人の女とはほど遠いあすかに執着している。自分で思っていたよりも、その執心は強いようだ。

あすかは長門がヤクザだと知らない。そのせいもあるだろうが、環境も立場も違う彼女との会話は気が楽だった。今まで付き合ってきた、浅ましい欲望をむき出しにする彼女たちとは違うからかもしれない。

長門はこの時間を純粹に楽しんでいるのだった。

食後のデザートの木苺のジェラートを食べるあすかへ、長門は問いかける。

「バイトは大変だろ」

あすかは駅前の飲食店で、週に三日から四日ほどアルバイトをしていると、以前聞いていた。

「大変じゃないって言ったらうそになるけど、まあまあ楽しいよ。みんないい人だし。仕送りだけでひとり暮らしをやりくりするのはきついもん。仕方ないよ」

ジェラートを堪能しながら、彼女はけろっと答える。

「でももうすぐ試験終わって、夏期休暇に入るからね。休みのあいだは、もう少しバイトを入れようかなって思ってるんだ」

「それはあまり賛成できないな」

長門はぼそっとつぶやく。

「え？ 聞こえな……」

「これ以上バイトを入れるなよ。あんまり忙しいとあすかに会えなくなるだろ」

そう言うと、あすかにきよとんと見返された。その様子は少し面白くない。

「おまえは俺に会いたくないのか」

「へ？」

あすかはますます目を大きく開き、小首を傾げた。長門がなにを言いたいのかわからないようだ。頭の上に浮かぶ疑問符が見える気がする。

「どっちだ」

強い口調で重ねて問う長門。あすかはさらに首を傾げつつ、口を開いた。

「会いたくないのかって言われたら、そうじゃないけど……リユージさん、ご飯をご馳走してくれるし」

「俺は飯を奢るだけの男か。ずいぶん軽いもんだな」

「え……ああ！ ちが、えっとそんなつもりじゃ……っ」

そこまで言いかけて、あすかは口を嚙んだ。長門には、彼女の心情が容易に察せられる。(ないと言い切れねえよな、この状況で)

なぜなら実際、長門は『ご飯をご馳走する』男なのだ。それは、あすかに会う口実に、食事をもにすることを条件づけたからである。とはいえ、敢えて口にするほど無神経な人間は少ない。

それを口に出してしまったあすかは、自分の失態に気づいて眉尻を下げた。こちらの様子をうかがっている。

しかし長門はにやりと口角を上げた。

「……怒ってないの？」

「馬鹿正直な性格だなあとと思ってるぞ」

「う……。たしかにそのとおりんだけど、さ。……気を悪くした、よね？」

あすかが上目遣いで尋ねてくる。その表情を自分に向けられるのは気分がいいが、あまりに無防備なのでほかの人間にも同じことをしているんじゃないかと勘ぐってしまう。「どうかな。まあ、まるで都合のいい男のように扱われるのはごめんだな」

意趣返しの意味もあって、長門は意地悪な態度をとった。するとあすかは、慌てて否定してくる。

「そんなふうには思っていないよっ。リュージさんのことを都合のいい男だなんて思えな

いって！ だってリュージさん社長さんじゃん！」

都合のいい男だと思えない理由が社長だからというのはさっぱり理解できないが、あすか本人にはその言い分がおかしいという自覚はなさそうだ。

長門は笑いをこらえながら重ねて問いかけた。

「じゃあ、俺に会いたいだろ」

「……う、うーん」

「どっちだ。はっきりしろよ」

「う、うーん、うーん」

悩む様子が面白くて、長門は畳みかけるように続ける。

「どっちなんだ」

「う、うーん」

「あーすか」

うなりながら考え込んでいたあすかだが、不意に瞳を輝かせた。

「リュージさんこそ、あたしに会いたいの？」

「……なんだって？」

まさに直球だ。

「あたしにばっかり訊くんじゃなくてさ。リュージさんは？ あたしに会いたい？」

あすかの向ける濁りのない瞳に少したじろいだだが、それも一瞬で消した。にやりと人の悪い笑みを口の片端に浮かべて、長門は答える。

「当然だろ」

「ふうん。会食っていうのはそんなに面倒なんだねえ」

「……おい。なんの話だ」

わけがわからず長門は怪訝な声を出した。あすかは「あれ？」と首をひねる。

「前に言ってたじゃん。仕事の相手と食事をするのは嫌いだって……。自分の顔色をうかがう相手と食事してたら、美味しい食事も不味くなるって」

「ああ。そういえば、そう言ったな」

「忘れちゃってた？」

「いや、忘れてねえよ」

あすかを言いくるめるための言葉だったが、本心でもあった。

六州会会長としてもフロント企業の社長としても、会食の機会は多い。どんな相手であつても仕事だからと渋々付き合うのだが、楽しいものではない。

それに引き換え、あすかとの時間はいやな気分になることもなく、楽しいものだ。

彼女は長門の素性を知らないから、へつらうことも媚を売るようなこともない。ただ純粋に食事を楽しめる。そんな彼女を、長門は絶対に手放したくない。

とはいえ、まだ出会って一週間ほどでそう伝えるのは、時期尚早だろう。

そこで長門は改めてあすかに念押しする。

「会食が面倒なのは本当だが、食事に誘うのはあすかに会いたいからだ。覚えとけよ」
顎に手を添えて、あすかを落とすつもりで微笑みかけた。

「で？ あすかも俺に会いたいだろ」

重ねるように問いかけられ、あすかは流される。

「あたしもリユージさんに会いたいよ。……うん、会いたいんだと思う。だって会いたくなかったらこんなふうに食事に誘ってもらっても、ついていけないしね。リユージさんに誘われるのは、全然いやじゃないもん。ってことは、やっぱり会いたいんだよね」
まるで自分に確認するような返事だ。あすかからは、まだ自信を持って断言できない

迷いが滲み出ている。

だがそうだとしても、これは喜ぶべき進歩だろう。

あすかは自分の気持ちに向き合う、最初の一步を踏み出したに違いない。

「それでいい」

その答えに満足して、長門は口角を上げたのだった。

第二章

大学の講義室の一室。終業のチャイムが鳴り、解散になったと同時に、あすかは声をあげた。

「やっと終わったあ」

約二週間あった定期試験も、今受け終わったもので最後。明日から待ちに待った長期休暇だ。解放感でくたりと机に頬を乗せると、冷たい感触が気持ちいい。

「あっちゃーん、今日の打ち上げ、行くでしょ？」

同じ試験を受けていた友人がバッグを片手に話しかけてきた。『あっちゃん』とは、あすかの愛称だ。

「行く行くー」

「じゃあ行く」

定期試験のあとは、友人たちと集まって打ち上げを開くのがお決まりである。女だけが楽しい。もちろん今回も参加するつもりだった。

あすかはリュックに荷物を入れると肩にかけて、友人と並んで教室を出る。

立ち読みサンプル
はここまで

「打ち上げてどこに集合？」

「一階にあるカフェテリア。うわあ、暑……」

すでに七月も終わり、八月に入った。じりじりと照りつける太陽の日差しに、二人は目を細めた。

そしてふと、友人は思い出したように言う。

「そういえばもう準備した？ 水着とか」

「ん、なんのこと？」

あすかが首を傾げると、友人は呆れた顔をする。

「明後日、海に行くじゃん！ まさか忘れたわけじゃないよね」
すっかり忘れていたあすかは、「あ」とつぶやいた。

そういえば、夏の休暇中に海へ行く旅行の計画があった気がする。

「あっちゃん〜？」

ずい、と顔を近づけられて、あすかは乾いた笑みを浮かべた。

「ははは……。ごめん、最近いろいろあつてさあ……」

「もう……。明後日なんてすぐだよ。準備は大丈夫なの？」

「準備はすぐできる……と思う」

「いい加減だなー。でも楽しみだよ。わたし、今年こそ彼氏を作るって決めてるんだっ」